



洋学文庫
文庫8
C 267
6



遭厄日本紀事附録上

目次

- 一 コロウ井ン等日本へ相らまじく後オホーツカ子御
 取事
- 一 オホーツカ出帆再ハクナシリ島より漂客
 を〜〜書と日本官同へおくり〜事
- 一 再ハ漂客を〜〜去船を御り又再ハ良在出帆
 をきり〜事
- 一 日本船を御し〜高田屋おのれを〜〜事
- 一 高田屋を御し〜着梅沙敷かよ〜事

412 1822

遭厄日本紀事附録上 リコルト河編

杉田 豫

青地 盈

高橋景保 校



コロウ井ン等日本子物語として後オホーツカ
ヲ帰ル事

甲必丹コロウ井ンノ遭厄の事の本編ニ詳あり
サレモテイヤテ船の錯士今も忘もヤシクハ千八百
十一年癸七月十日我文化八年
辛未六月四日の夜四ツ半の時あり
あり後子只驚愕狼狽〜〜心〜〜も斗り定む

船きやうかき兼計りし川路諸島を巡察し
建る御國を念ふ能くめ何とあれや我
くお救きし王長を初五年この國に
先ひ許しても故々悔くも思ふものか
只法士水夫より志を一すく夫を誓ひ
遣了人々存命とは救ひし人若教され
仇を誓きしあはれ日本の海岸を退く
心を改めり

初欠コロウ井ン等の上陸や
時船より全遠眼鏡
よく見し陸の人數多し
其中日本のよき

官人も見申す者もゆく彼を辱き門は入り
予ハコロウ井ンヲを舟より日本人の偽計あり
志は只日本人の種を辱し
吳邦の實を迎ふ
長くと思ひし舟は五年の以忽ち陸のかき
物言路り叫喚の聲は濱迎ふ
おるもの人
押出しコロウ井ン棄り
往りし
あは向し池を棄り
王命を鏡よそを祝ふ
多し人列を乱し
彼小舟より入り
檣帆桿等を奪き
おと明
くふ
又水夫を捕へ
彼門を
或き
門を
開り
其後物言路り
彼陳列し
見申す
あは

木鐸の條ある幕を張られたる日内を如何にも又此
幕の土をあらけり人新也のりき此付あある候
とてこの紀をうへ候を看る人新也よ且本編に於て
我々の幾何はサカシロキ獲狩のお人よ苦たらぬことを
あらぬ

予濱邊の如くをてんてんと破を止りて船を陸
より追ふ事と命をうす中と日本に我軍艦の押
あつ候と又ち中勢ひ折る我々和漢と物
目しこの大敵とす計りあり候るに漸く涼
さ僅に二尋とす候とてなりとて急むり能は止

事を以て船を退る原より陸よりをきあは破をか
る一砲を放ちぬは又も砲を放ち陸より船を
こしとあはれり候るに日本に大砲を山より
放ちて是を放ちて其丸を我船を越り候り
是より周る予思ふは高令万邦に威を示し我國の
軍威を高くし法の勅化をなせし御も此港を
返りてあはれ候るに是れ凡百七十餘斗砲を
放ちてあはれ候るに彼陸邊の前の海邊より堤を
たれを遊りて岸を攻め上りて候るに
事の如き一は此を以て物をなすに思ひ

是の炮を放つを止る破をあけ福を出し給ふ日本
人ら尚を驚くまゝに炮を放つるに我伴は
人数僅少す人々のあはし上陸し我伴を救ふ
べきの術あり甲比丹はあへて死を遂げんと
思ひ福中の士悉く怒り悩む此上は上陸し
陳腐は押入る若彼等を生かぬ救ひ出さず死
我等の命限り日本人を攻伐し仇を報んと是日同
ちる言はる概し実なる此敵と標榜するに難か
しと思ひしりかある時を船をさるるものあり若船を
焼くは敵は捕もあらず能く討死するとも

是を依羅別よ告る者あり且今と勅しクリル
諸島の海路も皆失はれ思ひ給ひし事なれば
船をさるる敵の銃丸の怖る思やめ破をあら
捕らぬ甲比丹は種々なき去るを能くしり其さ
し我おはしりオホーツカは歸りしは始末を告げ
候し子守を救の備をせし再ひ来りなんとあり
諸士連名は書しし書を小柄に入し給ふ思
候し及くは船を考へ出さずは敵の勢を止
らんし防禦の備をせり
是れは書を流し陸の方を金しし書を馬に

臥して市中より運つた光景におおきく我亦市中
を焼伐しとせしめりし事一は於此時船中の諸
士亦予も亦も船中の先方たるを以て推して主
長と定め各ゴロウパンをまきあふ辱き次第をたし
予は是を決しむ予是をたしし諸士のころり
皆し振すし今先日本は融気なるのを止むし
以何れぬれ日本を害す時を彼を捕りし
其の害も於存命する者及し此れ為る命を失ふ
及し是より由し速しオホツカは向帆し上官は
此れを告し彼等と故も仇を報りとも只指揮

を文ししあり

日出し後揚針後スレドゴを快航しし事し時り浮
り居し小楢の内を以て何れしや取しし彼等
楢の雲を以つしし陸し太靴を打つしを
彼より舟を出しし攻来んと欲し後しゆぬ
其時我亦流途をたしし波の波をたしし
岸を走し競りて新しき楢を流れし馬き小楢を
走しし我亦即ち破をりし陸しをりし小楢
より官ありし捕りし人の言信も知らん思ひ
し小舟しし探りしは彼楢を鏡をつけ其端を

渡り船ありたりと思ふは彼捕をりて我船を拘る事
んと計りしもの句んと察りし船を止せんとせん
只怪めり嗚呼無細無凡の猿持ありて思ふに
コロウ井ニ号ハ巳ニ教されり又ハ各々其日本人の恰
利なる條理もなし士人の者を教むべきに
今我より日本は知れし我等彼七人のことのみ
物もなき存命するや思ふに日本今
我等ある者と知りて我等も礼をせしむる
さるるにその事を知りて我等も礼をせしむる
りといヒラトツは名に日本人の於てありし崎岬

のふ村はやり日本捕をりて今この衣袴剃刀書籍
カ一斗を荷物に作り牌子に姓名を記し彼等
に残し居りて
茅七月十四日 我等八人乗るは海濱を出帆し
テイヤナの徳士は海濱を詐欺漢と名づけし夫より
針路をオホツカに向つて去せしは船中風あり
しは其船は海濱に苦ありし不幸な事なり
の氣に申す内つるは我等海濱の道まゝに
又折るるに於てありし朋友は再会の期もなし
やと形なきは其をりて其の事より其の事

を以て濱の方を伺ひ方一舟を以て迎れ来りし
おんうらと申す甲斐もあらず南洋よむてい霧海に救
村のおんうらと申す予の馬舞問ししを相おれ
おんうらに比しテイヤナのカエイト甲比丹 居住の五年の間
コロウ井シと勝を乞ふるはよ遭ぬる日まで待つ
るよまう散おける思相おれん毎は候よ逢ぬ
の地ししし懐きなる地

急きし十六の夜を以てオホツカにむらぬい
職を以ての炮を以てを乞ふるコロチテトト 館
シカエリ小舟を以て毎に来り候を官守いよは
候き

候し其は甲斐舟ニツキイの事ありコロウ井シウ
を委ぬる告る候し海に居る事と痛めり

オホツカ出帆再ひクナシリ候もあらず
を以て書を以て日本官守へ候りし事

予オホツカより一舟を以て冬を越えんは益ありし
を以てニツキイに候しコロウツカを以てベレルス
ルグもあらず海軍提督ニシテルは候しを告て再
日本を以て物いし人々を以て候しを以て計ん
予九月はオホツカを以て候り
イルコウツカに候しり候し提督テレスキン
思ふ予は過

一日岩々六已オホーツカの上日、テルフルクニ
係る船を上疏し、新軍艦を出し日本に捕せし
しものを赦さざるを願うる事ありと云ふ事あり大に
喜ひしイルコツカより其命令をすする所
定より高射官は他の仕事の際ありて候り
別の軍艦を出さるるに成籍しとて事なき事あり
一、再びオホーツカをゆくテイヤナ船とてな成
クルル故郷の葉をとりけ且クナシリに向て遣厄
の老の杖とつれをばしりしあり
コロウ井この記中より云く日本に良なき門を已に市

正の命をイルコツカに送り、其後をいぬ候に彼
よ我國政の任負し、和吹を好むの事を嘆き
候時、俄に別れをきき、知事も仍り候り、然るに
彼亦云く云く、日あり捕せし、俄に別れ人古皆
生命全ても候事あり、死する所あり、其後
尚和吹より云く、一、

千八百十二年三月 我多紀年
壬申二月 俄に日本人を捕り
オホーツカをゆくテイヤナ 船を沈んとす候り
此を以オホタ河 オホツカ河 の所あり、流るる候り、
其の甚漸滞せり、甲必丹ミニツキイク 中ノミ 候り、

北道より霧津晴礁より余の舟危く船を破
るべき大厄難く多しなり

八月十二日城下夕七時の上トロウの北岸を略
見出せり霧津晴礁風逆より潮く十のり
テフリス海峡をよこし十三日夕方エトロウソシエタ
ナ婦シヨクナシリの海は深し八月廿八日我舟は彼
我舟は各けりクナシリの故傍港に船を入り
彼港の要害の所十二三所許の要を築き
又く海軍の所は十四日大砲臺を二行に設け
たり我船此港より入るは亦く日本人の晴礁屋

の内は隠すべく物を貯るは亦く馬都よりて物
多し陸軍の海軍も條あり本條の幕を
張出り馬都あり陸軍の屋根より印んぬ
とのなり彼舟も皆陸軍に引付けたり此形情
あり日本人の我舟も前よりあるべきあり我
舟は彼陸軍より二十所許を襲はれ破れり
相伝良なきもの二年已のホーシトフの捕へり
舟より少くは彼陸軍の所を突くは亦く
官吏の道よりしき候きし札を日本海軍に傳へ
思はるはテイヤナ福の日本海軍より傳へ

く且精しくなりしに上你的添言も何んが致
しを俄に治し我も治し〜と云りぬ
彼らもよき事なり〜と云え〜 若くは此の
三条の事については船の多しあり〜 事柄二言
日本に破船あり〜と云す〜 俄に治し
〜の事を記さる也〜 又云今日奉る御文
事い我出づるのには〜 惟るの道〜 彼
何ん〜と云りぬ〜 治しぬを先におち ちま
ぬ〜 とい先我も事なれぬ思ふも ちか〜
何、清き〜 是れも事〜 つまや〜 ね

予語り〜 你的出づるの何れ船〜 きや〜 云れ
い甚可真あり〜 事なり〜 予は〜 の為〜 一打
止ん〜 山力あり〜 其他のを書け〜 残をきり
され是を〜 名〜 志〜 懐〜 顔毛〜 是を
催居り〜 畢〜 我月のある〜 春は〜 是を申
以のあり〜 也〜 也〜 知れぬ〜 祐をけ〜 のあり
我あり〜 也〜 也〜 書札も實は我信言の〜
也〜 や〜 也〜 但願も〜 船中〜
信は〜 の日知を〜 或は信は我等の
姓名を〜 也〜 也〜 也〜 也〜 也〜

コロウ井シの名をも知し日本文字の如く書しあ
たらふものもあはれ候今も書中のコロウ井シ
の名も何れとて言ひ給へり候し候し候し候し
比校せしは同く候し候し候し候し候し候し
送し候し候し候し候し候し候し候し候し候し
書を持し候し候し候し候し候し候し候し候し
船の破れ候し候し候し候し候し候し候し候し
より候し候し候し候し候し候し候し候し候し
西田と陸屋の方へ候し候し候し候し候し候し
陸屋の門より候し候し候し候し候し候し候し

船イシヤを候し候し候し候し候し候し候し候し
船より一人或書をも持し候し候し候し候し
か候し候し候し候し候し候し候し候し候し
おし候し候し候し候し候し候し候し候し候し
人の他方より候し候し候し候し候し候し候し
船の破れ候し候し候し候し候し候し候し候し
我船より何れ候し候し候し候し候し候し候し
候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し
あはれ候し候し候し候し候し候し候し候し候し
の如く候し候し候し候し候し候し候し候し候し

間彼の陣より来るを待よ何のたふしありて其の
終り金巻を脱ぎて渡邊をへん張り彼日本人を
上陸せしめし知り陣屋までのがりありしき
このまゝもして戻さるるあり良兵衛も屋敷を
脱ぎて手をあきらめたり然る人形をこゝに
見えし彼の陣屋より只一人なき塚の工とあり

再び深谷をへりて古館を脱ぎ又再び
良兵衛の陣屋を送りし事

初め我未敵を防ぎ軍令を袖中へ入
夜直砲のすゝら鈴を鳴りし時とあり

一む又新水より一は武志を備えし舟は
水桶を積岸より出し水を取らむと且は序ま
一人の日本人を陸より上りてあゝ同様にちと持を
しよ肯りしと云ふ始送らるるあゝ是れを
日本法にてるよあゝの禁の中ありはよ依り
俄に形法あり角條書あり日本人は持を
あゝし新水よりめいよわんと云う固く是れを
書し日本商人あり陸よりありは敵討て
陣より告ぐる日本商人のあゝ出くあれを
出せしよ商人は是れをあるまゝと云ふ少人数

しつゝはなすゝめをなすはつとて俄に野人
告下しとて他の言ありて去るぬとて是野人夫ら
クリル人木の肉を食て姉く体もろくクリル辭を
知らぬ何をやとや知れぬとて是日野人
居るんも彼の傍をたつまよの次野内よりクリル
人未だ彼を逐て引立門外より押出ぬとあり此
男は流るる老とて又予は彼の言は彼をよ
留り度知むし官人の教ひつねありとも留る
ゆゑと云れぬた野人の言何ぞ許さるべき
是より由り考ふると初より彼とい日野人の阿

しつゝはなすゝめをなすはつとて俄に野人
告下しとて他の言ありて去るぬとて是野人夫ら
クリル人木の肉を食て姉く体もろくクリル辭を
知らぬ何をやとや知れぬとて是日野人
居るんも彼の傍をたつまよの次野内よりクリル
人未だ彼を逐て引立門外より押出ぬとあり此
男は流るる老とて又予は彼の言は彼をよ
留り度知むし官人の教ひつねありとも留る
ゆゑと云れぬた野人の言何ぞ許さるべき
是より由り考ふると初より彼とい日野人の阿

其の事いふ事思ひ出せし彼の厄は遭し
其の什物を海村の船に奪つた何れや試
せんと思ひロイテナントヒラトウの司とある運送舟
の舟主数人を家を彼村の邸にむけ船を
よせしをえし日本又船を好むる者を
彼岸は彼方のりきせしむるヒラトウ
ありし彼村の事を述し其の事ありし物も
ありしといふは其を捕る人々の恙なき事
と思ふに次日日本人を人を上陸せし日
本官吏の彼村に船をせりし事を告しめ又

良なるしと理容を説き、勤く能き、日本語の
書面をせしめ、彼の持せし書札の事いふ予
日本官吏と小舟より出逢、船中より一と一
男が彼日本人相あり告りし日本官吏彼
の書札を讀みし、轉て其の事、俄に
其の甲は丹接話せんといふ上陸せし
し信告せりといふ事ありし、余は省する詞あり
如何なる我出すると思ふ、其の事、其の詞、後
せんや又遠き、其の事、其の事、其の事、云
及し、予は物も、其の事、其の事、其の事、

あつんと思ひしは先事かきかす思又使り
来りし日本人をも船中の座席の肉は尚あり
我船の船客ある事深き知は出せしと
相も俄座形位を知りし日本人を使ふ事
今更益あり我方より屢々日本を更しつれを
送りしともつるも教書をもつておのれ先事
未棄匹んん外あり良在船中と俄座形位
を知られた徳を上陸せしめん事いおり易
しと一先彼を上陸せし再ひ船より来り
たる時我船より一人の日本をとりて去らん

事を隠しつてありしは申す計を秘せたり
今も日本入の節一和事を示しあも款款せ
され今も止るべき日本船若し海濱を
往來せしありし事ありしと船中の好き日
本人を捕へしに遣はる人への成行を以
て度々しりし事あり効なき罪を徳とんと
思へり然るは亦後らるるは海濱に日本
船一艘ありしを已しは秋よりぬれし日本人
の航海止めしとて是れぬれし謀もおきし
以上は徳良左衛門のしるし徳を上陸せしん

あまのりて春属を種乳さんと思ひ良太郎の句ひ
唯只形を昔せん思ひの体未家より御くき忠告
を忠告厚しと云はれ信思ち免を失ひ去り南
越やと我子やと予の体と云はれ信思ち予の家
ありと也予を信しと句ひと云はれ信思ち又思
心を痛める松よ中一吾予と自教走一吾
予の信思を去すとい信思と信思と信思と
故例せり人といと也我子と信思と信思と
已よ六年信思思と云一今日本より信思
信思の信思の信思方つき自教走んも計り信思

あまのりて信思と上陸さんといと思ひ今一信思日本
信人よ我おととをいひやんとい計り信思と予の意
を信思と信思自と信思と信思と上陸といと信
思の信思とい力ありと人信思とい信思再信思
信思と信思といえり予信思と信思一人の日本
人を信思と良太郎の書三通を信思と信思一
ハコウ井シの書今クナリ信思と信思と信思
と信思と信思と信思と信思と信思と信思と
信思と信思と信思と信思と信思と信思と
信思と信思と信思と信思と信思と信思と
信思と信思と信思と信思と信思と信思と

時らぬ何ききなる方を身物よめ其予思ふ
よかゝる上は我亦正しく恨を轉き入きりし
我於延も日本人の如く無法氷道をお
棄かゝりる爲き振も前日其只良を束つ
一言のこゝ外は神捕もあゝ其言を信
きいあ亦まと思ひ今つ意確信を以ん
欲し又良を束つを止降せしめ日本を更
信あを教やうと云へつ神去を信ひま
しと信したり我物よ命しと時宜し信
降し押する爲きの信を前し正切

良を束つの上降し後又降し其のききよ
り来りよれは信を待たし思ひ是よりけ
海濱まで日本船を奪ふるは実を信
おすい世を返すまゝとありい定先也

日本船を獲ひたる因を其を獲るる

同月六日 俄に子船の日本小船を以て
以れい速りロイテナントルタコウふ二艘の信
以て信お舟を捕えしを又スレトウコトサウ
ニリーフと加勢もやりりよは連日日本船を
追付奪ふる
しるは船人皆逃れ去り只日本人二人を

一人を渡すある業の内がサウニリトフク捕へ来れ
り予は其を又奪ひしは渡すに屈して何を言ふも只
志をなれし声もえへ工へ工とのこりかへかへも
我事をも解きし事やあへん只ちふ活物あるのこ
何の事もありき鳴呼此のときおん勝の民
まそめ何ぞ我事なを返してんや

次日又つ艘の日本船沖より此海灣にをり来り
何れ日本の大船と見えし予はルゴウをきり是を
驚かしむ但は危しき必静しき言を思ふ用
ひしにのみ只怖しき論し其船を奪ひ取ら

を捕へ来りしと教へやぬ一時行きては彼日本
船をわりの闘争あり我船の獲りしは又其船の
ロイテナントヒラトウ向り来り予は告げし我事
快船此日本船は追つきたる所を知らざる
かく防戦の用をせしむし止むをば我事
かへ向く流を放つしつ舟しり此日本船
忽ち帆をあらしむる其船はは渡すをりき
其船中の人の水は入り遊き遊むとある
者ありしは我事なをりしと告げし我事な
引上りしは船は是を向くしり又水り

溺るも阿る此船中凡く六十人阿ると此船を
ハ即ち捕へ来れる之をて此船をあるとのいふある
衣履を為し一短刀を帯くといふも其き人と
見えたり予此男をカエイトト付し入道といひ
予の向ひ日本風をて叮嚀に禮をせし予も彼
を号り以れい彼の甚くんを安んず親しむる体
少く椰子の葉をまき予嘗て良た忠門の習
えり日本風を先向れい其田舎の事と雖も
セントウフ子モ子と名くぬ其の船を船を
酋長といつるものと云彼れお上トロウ嶋より船

館の港に付んとするものなり船は積むるもの乾
勇之風の悪きまき今クナリリの湾に入んとして
と予後彼は始末を略述り彼良た忠門の書を
クナリリの官吏は送する也と云一徳きをせり其彼
忽ち船を〜云々ハ甲比丹モールト其外其人の俄
解却人古時松前あり〜何事かの月彼をり
クナリリより船を〜医〜何と云へる高の幾月
を強〜と云〜モールル安を詳に述り〜我出
是をばある中より其彼〜つ云コロウ井の名を
云い〜を〜因〜船〜と云々〜厄〜

人ぢふ恙かしくいふは彼ら身の上の爲よかんと
思ひかゝ我あは徳りる前ん、志の、其俸の
降あゝ是云且傷をいかに徳しと云出るとの
も何し又良た馬つらコロウ井ン等が教され
たると云へる今又教り、如何あるか、我あは欺
き、や衆は、ハ、ホーレトフの侵掠を怨む、尔云
つら、或はコロウ井ン等が恙かしくいふ、代は已を
我船は捕へ、多んと志す、かゝ云、あやりの、
良た馬の、徳と衆の、おれ、つを、る、ま、あ、徳地、
あ、兵、んと、お、ま、ら、ま、今、く、ハ、ナ、シリ、の、殺、人

あま、こ、い、ひ、て、一旦、我、志、を、遂、げ、ん、と、計、く、コロウ井ン
等、を、教、り、た、ら、と、云、り、め、は、夫、前、良、た、馬、つ、ハ、我
等、を、欺、き、た、ら、と、云、り、て、再、以、我、船、を、捕、へ、た、形、を
隠、さ、し、の、あ、る、や、い、お、り、し、し

かゝ思惟、ゆゑ、と、定、め、難、く、尚、コロウ井ン等、の、存
命、せ、る、も、計、り、難、い、先、彼、を、藉、ふ、企、を、ハ、制、止、を
し、た、ら、も、主、と、す、ら、な、の、コロウ井ン、の、生、死、の、あ、り、
疑、し、ら、れ、ハ、船、中、の、諸、士、の、意、を、整、む、ら、の、い、お、り、
さ、り、き、且、内、一、人、の、云、ら、れ、ハ、我、亦、去、年、夏、を、め、て
エ、ト、口、を、あ、ら、ま、て、出、達、せ、る、日、本、人、を、思、ひ、出、さ、い

語らざるをえより富平の一日の風習を
其所持の形をその配するの恰も市西の職人似
たりと云ふは其の故を十トシカルムキ故に於て少く
あり

予が故に俄に其の往むるを告ぐその
役をせよと云ふは俄に其の往むるを告ぐその
但クナシリの方まの口ウ井ンモール号を載せし
以てそのやるる語りの故に争ひを云ふは
の虚妄なりと俄に其の甲は丹モールに他其人
共よ恙なく其の長く身を自由なりと云

中を道に逢ふるも皆官卒二人従ふのこゝろ
よく遇てしむるも又予は其の六何令俄
其形を其の必ずとあり辭するありあり
予も其の指し明年の必すも其の國に送る
と云ふは其の故もんを安んずるやん
其の故の介漂流の日其人四人はつて俄に其の語を
流さるる我のそのも今も其の且ニケールボイク
腫物を病あはれはつて度者其の故に其の越年
病死すべしと云ふは其の夫のその故を其の
送るは其の故に其の故に其の故に其の故に

椅子をとりよるゝ赤い傍に在りて椅子は居るを
教へ思かへ思ひ没するの客をゆゑ幸よ我前
中の若き外科の妻尚少婦ありて居るは待を
出〜〜とては赤い妻は是をえ〜〜とて
赤くは椅子をけし少婦と偶〜ぬ少婦は万国の
婦人ともえむゆゑとては日本の婦人を見
収ひかゝる粧も衣装も目をとめ居るは赤い
妻は欧羅巴婦の粧をめつ〜〜は視〜物中
に居るもの志強きよとては是〜〜とて
少婦の顔と接〜白粧のきと知り笑をふ〜む

ア、ヨイア、ヨイと云〜〜とて赤い傍の妻は鏡を
出〜〜欧羅巴の婦人を習〜〜とては免
昔は鏡よ写〜〜居るものあをえ〜〜とて
赤い妻は泣〜〜とては鏡を写〜〜とて
白〜〜ワル〜〜とて又一人の婦は十八歳計り
ま〜〜好き女ありて容貌中筆あり〜〜とて聲は
慢弱ありて待わよ柔葉を養〜〜は好い甚く貴
味ありあは法〜〜少の物をよ〜〜とては
予我前の婦は命〜〜別は法〜〜かれを抱〜〜と
云はれは赤い妻は是をさ〜〜とては待〜〜

マストコルフ橋の上にある架のは登りおせり予彼あり
カユイトをアキしむのもりも皆散々して肉に入り
恰も君の前は出らうとせり又彼は銀盃を以
て俄に火酒をよみ給ひ祈り我水夫
等も睡りあつて光ある鈕釦ボタン或は彩り漆
たる手巾おとせり常一は落しおのりて下
持の日本骨量コシモノを出し是と交易せしむ又
赤い水桶アキの前をえりけを已り船をやり
水をえんと清ひ水は彼の更寄より桶をえり
持寄りせりをえり送り来ぬ先程とち我

等を敵のこゝろ人のかゝるはある交をせり
予は於て悦びは後よりきかゝる彼の更寄り別
りしゆりぬ

噴きをりて頃船を海上に出さんとせりは
方より大船を放しぬ是彼方より我船の動を
見しは君は相おしと思へり然るに君を
アキ知屋等は無益の業ありきと知れしを
てクナシリと俄に船の病は具かゝぬやあり
長崎は是より後とせりといえり此時風忽ち変
りてわづ成りぬ次日まで此海峡は破泊しぬ

海底砂石の如く破面は次第に破を投
せしむる如く破を引くは海に引
徒櫓を引り破を引く幸ありて此危難を
免せぬ是計無違の法上等二度の二幸人
命の南の事とカエイトに對居してよきありあり
コロウ井ンと云ふは予種よ官をかねても
勿く彼を知らぬもコロウ井ン官職姓氏をま
るよ同じ魁角左衛門の人と云ふは予
思ふは俄に邦人の姓名の稱呼は日本人の耳に
馴れず音と云ふは予も思ひ

予又コロウ井ンの名を種よを呼ぶ中
は彼コロウ井ンと云ふを云はるは予知りぬ
其人も相おま居りし予を云ふは予知りぬ
其報を云ふは予を日本人は俄に邦人の徒
候と云ふは予を云ふは予を威儀あり
てモールと云ふは予を云ふは予を好ま
徒よも相おま居りし予を云ふは予を好ま
るしと云ふは予を云ふは予を好ま
と云ふは予を云ふは予を好ま
徒を云ふは予を云ふは予を好ま

たのきなる様々しく已に首を括ぎぬは話して
計り次第を思ひ南島よりさき北島を先とし
の更し使ぢめよ已に狭路を我々の地をなさ
むと表裡の計をなさむん又使ぢめよ使ぢめよ
日本人と商してゆく事次第又良き事と副く
ありし者も中途に隠己一人ゆり来る偽
言を心くすよ言へ且我々の返さんせし計あり
明く又此の如く商す話よ日本國法にて日本人
二年の久しき英國よ商す者も商すの後出よ
其の便よゆりしを請ふ先江戸よめし

に船来を審訊し後或は生涯囚のてりて
おのづからしをゆりしもるし我々のありし
日本人おも高橋少助初よ二年も商す者も
其の如くは法よ返すゆりあり

日本海上の難事を懸れくりル此島の事を洋の
船を出しテ只ロウセ飲の各つきたるブユスロレ海
峽保梅は海峡の各地図を又し物々心に向ひしはウルフシモリの弓海を各けしんに向ひしは
晴潮のしし星学の試をあるは軍一かき相
此度き海峡よりオホーツカ海より西北迄の
諸をさし又東洋よりワイユケとマタウ保梅はワイユケ

ウルクワキマタウモローの諸島
ウルツフモモリリのおも連ぬる島
又西やうは海峡とあるはつる島の海國も
知はあれははとコロウサン海峡と名つきたり
是れ我等と航海の業を共にする不幸の遭
甲比丹の名を聞きん為あり

第九月廿二日 越前着 檜山越前の大山を遙
空より望み已に雪は深きを道に林麓は尚
みづらやうなる雪も烈しかりし故に雨もウルツ
及エトロウの航海は今此時を以てしるも航海
湾と雪は埋るを幸しけ地よりもあまのり

是れたうといえり 風吹所はアロツカの湾ををり
き明るはペテルパウルス港に入んを思ひ候ひは
入風ありかりし再び大洋は吹出され辛苦して
港にまをりしるに度ありし漸く船を入る
は夜晴し殆ど強き南の船を破れしを大危
難なる事なりて免れ候し十月二日 越前
より船は港に入りしは船に破れり候し
はつらオホツカのブロヒアント船ありし二艘と亞
墨利加の機を早し立しトベル地名ありの商人と
属する船にけ船は廣東と馬泥刺呂宋島の名の

遭厄日本紀事附録上畢

遭厄日本紀事附録下

目次

- 一 再び日本渡海の事
- 一 高田屋を船を上陸せしむる事
- 一 松前よりコロウ井シの書物を得る事
- 一 シイモノフアレキセイを卒以て高橋三年クナレリ又ある事
- 一 再び三度日本渡海箱館よりある事
- 一 俄羅斯人を取り本國へ帰船の事

遭厄日本紀事附録下リコルト所編



杉田 豫

譯

青地 盈

高橋景保 校

再び日本渡海の事

高田屋が船に已よ二十年未日本國の港をまじり
り弘く交易を為し航海の事あるは只政治家の
名をたしむしこの今彼ら勲徳の輝くや
やの傳ふる孝性もやかく思ふもの思つる相承の
徳を流く捕え来れるものあるは只安心せしめんと

明治五年と東條地と云ふ所の西國使節と來りしと思ふは次公等は日本に款待せんとせしに
命をとりめけし因て俄に形勢の急変と日本
數百の士卒の生命を救へしと思ふに我方を
勇まざるに勵みしきよあはれ但予方虚弱ありし
に過ぎる者極少却加の氣候は堪えらざるを思
ふしと云ふ我亦亦其情を諒し一層憂せしに
彼等西國の人心は深き感激し今もて俄に形勢
ありし日本人も凡て俄に形勢の急変を思ひ
よ告ぐるに及ばず俄に形勢の急変を思ひ

一と本國の人は流しんやと云ふ程にせしむるを
攘きしに他ありしに彼原より當りて我多し入
くる日本のものは能く俄に形勢の急変を思ひ
拘りあきおもせよと云ふは糾紛を解らんを
御衷を抽きたるは然しぬるの事なまは糾紛を解らんを
あるは是は本國の勢ありしに及ばず日本人の所
為の急変を解けしと思ふるを判りしに其本
國の法習を以て又日本人の異國の事情を以
てしるるを以て云ふるに日本ありしに隣國と益んを
闘争を起さざるを好まされども只俄に形勢の急

千八百十三年五月 我文化十三年 癸酉三月 の船の役を爲す
又イルコーツカイルコーツカの總督より命あつて 爲す 檣沙部加
於て日本渡海日本渡海の役を司る爲としてロイテナント 館
ルタコウ 各を以て 代りて 爲す 檣沙部加を以て 爲す
しめ 彼れ 代りて ロイテナント 館 ヒラトウ 各を以て 爲す
初次日本渡海初次日本渡海の副船ソチカ 各の王長となつて
性 々々ナシリ 海上の難風のとどむ 船を以て 爲す
檣沙部加の役を以て 爲す 船を以て 爲す 船を以て 爲す
丹誠を以て 爲す 船中の諸士及貨物の大半を救
ひ給ふ

五月六日 檣沙部加 海水を以て 爲す テイヤナセアハツカ
の海に出 同日ナシリ 五月 に出るを以て 爲す
針路を急ぎ 二千里を以て 爲す クナシリの 諸島 諸島
役を卸せり 彼れ 海渡の 諸島を 離る 事 爲す 爲す 爲す
如く 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す
使ひて 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す
とて 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す
爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す
の 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す
爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す 爲す

の平倉やめんをこまこまに
あはれよけちよの遠見
るものお町寧ろお屏又リコルトと成陸下
原のくさをもひひと赤い湯を首より万幸に
言ふはせかしく初顔の吏うあうしを御
原しとちあうて皆く替へてし沈黙せし
原きく意あうとえ水まよれむとくく己う繪
像の箱を出して彼う婦人よよあ屏といひ又
彼う親のきお物とくく秘蔵せし大なる佩刀を
けりよは儀をさうは屏といそあまは話して精
思はさうはけりよとて予は火酒をとくく水まを

別の盃をこまこまに湯水まをそを飲み後船の
原よ出く又他の一言を別れ思おけ水ま
を山岸よ送るやうに屏あは陸屋の言はけり
赤い湯う今水まを話せしと彼をオホツカ
連性んといひ予は予はあまといひくもの言甚
に意をほまは彼水まを再ひあまは水んやと
難きよあはれ予は彼を皆とくくあはれは彼
原よあはれまひしおはあまはあまのままを
原よあはれまひしおはあまはあまのままを
原よあはれまひしおはあまはあまのままを
原よあはれまひしおはあまはあまのままを

定ぬ何となく予已よ日本語は通じられ
彼等を行く滞あり言さるゝコロウ井ノ字も
あく在とありいそ何事よ急して料理せん若
已よ死せりし時をそのの破色しるあはれさ
かゝもそのの果せつゝ厚しと思ひて之船中
予うさしを終りるも同意して其く其何と
あゝ思かして其痛し向ひ你陸に往むと欲
せし往へ一凡く你のさしは隠さるゝ一你に
歸り来りきり時と予は生命を果せしきありと
云られし其痛さるゝらに同僚の確信をゆき

此れ才ホーワは互命を食うゝ次し云ふ
予も能ありやめ之物に其の成就せし時
予も面目を失ふのゝお涙必死せん今予
を了る隠むしあり予らあさし之まゝは予ら水
も同く陸に往き其の日中國語に悟り給
子よ今いれ予は免さるゝ明船あり陸に至
らん云り予又云れい給は予も自れ你を送
り給へし其痛しを以て其まきりる体して其
言し給へし其痛しを以て其まきりる体して其
云りおは給傷の象を佩力とをぬまは持を也

又躑躅すれば御命を惜むる水も今も流る
オホーツカは連行へおこし予ハ命を捨つる外
有し其強き此のこゝに敵を切り彼を
細く水まき持きこき思ふ予ハ何れも
腹を切り死んぞとて之に討た彼遠く予ハ
屍として重箱を以て埋葬せらるる日本の方
と次々更らる予を以てあはするたかす
るのあゝ尚流らんあゝ予を習せし一言
予ハ念激の流きこりらと胸長とを刺殺し
胸中の兵士等々周章するを慮らんと思ひ

種ありといえり

此のこゝに予の悍烈あるを我改羅巴人
作き慕ふやあしそり人ハ其を勇士の西行
とて其其人を慕ふ其子孫と此の為り
榮へあそ其是よりそり又臨み行る
このち予身ハ久しう其一族も郷里を以て
此のこゝに其男と同一カイトハ起す
又胸おとすて怯く思ふ然るも予愛あき
縁故を知りし予ハ彼は向ひ何れ予と胸
長のこゝを殺さんと思ひ他の兵士等も及ら

恙怨を執せんがしる船中の火業は火を放
い維り一人のさすまじと聞よは若りるは怯まの
態あり睡中の人を教をを勇たの所為と知
しるや予は然らば必死の命はあきんて我あまを
さへく奇あり哉け人やかゝる詞をすしより予
益々彼を重し致ひ也

今田尾志を傳と上陸せしむる事

翌日 係指すあは日限を致しんしうけし兵部方と云ふは必死の語かん
り影をいふより其様あり我の要ありきりては捨たらん
予前を内し其は陸よりいんを陸よりとらき一吹
陣尾より二人出するとのあり是をいんるはあはる

を海に垂りたる水まあり我の上陸し船は動さる
海濱の溝ありて水は動して流るる人の水まは
クナレリのおまより使して取れりて予は流る
るは水と流るし一但我船を以溝の内より
へさるるし水と流るし一は流るる云ふ
らるるのりるは船に二人の宿まはるはあり
我はしるしてこそを怨を称せりし前を傳とを
内二人と予は取れりて交する人といふは彼水ま
まをさるるいし他よりいふは次但宿まは出速し
を傳ありし一といふのりるし予は官使より領るん

僅の相を齎らざるは彼水更に紙してきりり
又けを返せりかしては尚款對の字にありと
思ひしはたかき清なるは是れ日本國法にて
國人より相を交るるを禁むるありと

又彼を人の名に松前せりしはあつとて書
れを認りしは書を予は授けぬ予は是を以て必
系回條の書に有らんは收ひ切らひしは松前
と稱しけを認りて吾公は回條の書に信を交
んは是きは松前は此書を信家よりしよらん
なき書付ありしは是れ松前を以て押載き言

出さるるは一度ありし言事なかりしは是れ松前の
我あり幸とぬものなり又予は向しは松前と
云ふは公字を以て指して是れ詞を予は半の
俄に強人ありしは是れ今は今松前の
の官使の通ひしは予は明に是を以てありと
しは松前は是れ時宜しは是れありと

予は松前は詞ありたはしひしは是れ是れを以て
して是れは是れは是れは是れは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは
ありし中は是れは是れは是れは是れは是れは

七和の病言敷りよ苦なるに死せりよ水舟に決り
必逃へしと彼又云りよ明船と船まで公々
船よるより一しつり水まよと船導りて陸舟
往んて予其言よ何を告りて一船一舟の中
軍備をたすしめぬ次日船の事を又復告りよ
陸舟より出さるるもの二人を一人と白きものを
振るかのし事ありと是即ち七和の病を告り予速
にみよと出さるるもの一船水まを伴ひたり
船よ入るよ告りよ相おより言信ありて俄
陸舟人おの安全ありとの志あり但按針徑

大病して十日病食せられ日本醫の治を
受るも効せぬ又後の言信より船に候りし
相おの病カユイトり入りおの相お甘りの書
札の箱を出して予より一とありぬは内と日本
何の文と俄陸舟に送られ深々と収めり予
是を看るに二十三日城領解一千里の友人是
右の報を告り一舟船よるよ七和の病を告り
を附しんり言信ひし事ありと言信を記し
けり彼を治し送り候し忠に次日雨降りり
七和の病又船よ出りて時をクナレリの何人よ治す

其の儘又云々下好き辯多とゆ〜公等より
送了慰めんしおと〜け地と今漁奥の時
日水々〜あは漁者有人を出して奥を捕ぬ
あ〜そも獲るま〜速く持来る〜と命
お〜〜と予乞を謝して必んを費さるゝあん
と云りぬいけと予は於〜方去るのめぬ
只親な〜あ〜き〜のを解〜ん〜思〜いあり
と云くぬ切〜〜けり予彼を送りて漁の
漁あり〜あ〜り〜別れぬ日〜と支より二十所
許を引〜陳〜ゆ〜ぬ

次の日とてと筆あ〜と加〜書来〜さり〜の十六日

保抄次のり次と云々
推し七月十日のあ〜ん即然月方

早夫は彼達の道よき〜り我
方の道も彼〜り我を又彼と彼〜陳屋か〜
来ると〜さ〜り〜ぬ彼と〜〜〜候也〜と予ん憂
〜思ひ〜り〜と急ぎ〜彼を〜運〜入〜〜ん〜候〜り〜
〜も〜謝〜て〜か〜〜あ〜〜起来〜ん〜思〜ゆ〜〜と云りぬ
彼ら〜候〜あ〜〜あ〜〜思〜ひ〜る〜候〜と予ん〜候〜は〜白書
振来ぬ〜子〜病〜より〜と〜さ〜ら〜や〜と〜か〜〜運〜船
の〜運〜り〜と〜返〜き〜と〜云〜り〜た〜止〜り〜を〜持〜来〜を
又彼を〜叫〜び〜候〜怒〜や〜と〜云〜ん〜ぬ〜候〜し〜和〜ま〜

別き御んとしてるに法ひ船主等とて一同
新の咽^{トキ}喊^キをあけ也

シイモノフアレキセイを率ひて言橋
三平クナシリにあり事

弟七月廿六日城^七前^月前^日傳來り告りて杉原
船御來り前^日予り御りて忠告の言は言
ふんとて甘好の次友一人クル人のアレキセイ並
捕りて御座部人一人を伴ひ官船にては受
取んとしえり予り中^に御座部人古官人の内
なると思ひよ前を傳り水使の用ありんとす

是官船のなるは御ん政務を計るよと御り
中ありし事也一不果り暫くして御座部
のえ申あり其傳是をえり是其に官船
といえり船の号は帆は赤き糸形を染又條
ある幕を船端に張り中^にの儀を立儀の換
振り各殊く又四布の長鏡を立つ中^に鏡の周
りを黒く染りて山形を付たりけ給ふ
其人の官位を知らずといへり陸奥の方より小
舟を建りて小舟數艘を出りて官船を逆
へ是を率り陸奥の方より出たり中^に其意旨の行

列らば何なりや、或る處にて又くさうき前傳の
官船の或る子細を以て述ぶ、先知さんて、
廿七日我七月我船渡邊を望む、ある人出たるとある
一人は白き袋を佩力、其の袋の裏に書あるを
見り、其人は維新の事をつかひ、但し人俄
羅形人は其矯く日本といふ、其の傳は、
其後、おのれ所家の、船中の徳吉と名を屋
俄羅形人あり、事をおし、思
け、時折、福又、お彼、海に、往く、水と、取、
彼、人、湖、清、の、邊、を、す、我國人の群、

舟、を、見、て、彼、出、た、り、俄、羅、形、人、と、見、し、
人、只、三、歩、許、も、往、く、を、清、の、邊、に、至、
る、其、の、傳、は、十、歩、許、も、往、く、我、船、を、見、
て、其、頼、付、あり、を、見、て、取、り、て、彼、制、禁、を、
思、は、清、を、往、く、を、見、て、其、時、水、源、の、船、を、
取、り、付、り、る、其、名、を、取、り、て、彼、を、見、
水、ま、し、い、も、つ、あ、る、を、告、り、お、我、船、を、し、い、
し、し、い、も、つ、あ、る、を、告、り、お、我、船、を、し、い、
取、り、腰、を、取、り、お、の、を、取、り、お、一、言、を、出、し、
頻、り、は、流、を、流、せ、り、福、は、流、を、取、り、お、
其、名、を、

下々實は哀あるありし由に予彼を嘆く方なり
我同僚相あてし無しのせし官ありしは今
年そのあひしは幸は存命なりて内相
任^{注文}にニコフを共々患大病と告ぐぬ予は
あましく聞きしありは胸中の人々皆首を伸
くあはれし涙んと流るるありしは皆聞
みも止ぬし其るる予は其を憐れむに
又しは予の唐云りし此方なるは其れは
其行の次官ありし其姓名は橋三平といふ
此人予は命しき公は彼ありき條二ありて

懐中より^{オボヘガキ}書法を出ししは漢なるを
吉橋三平首領抄初め初めと告ぐ予今
初め其の命を免るるは其れは日如く捕
るし一俄に其人を免るるは初めは其れ
初めは其れは西法にきりし國法は其れ
初めは其れは予は幸なりしは其れは
殊に其れは我國より抗敵をとりて
懺悔の次第ありし今初めは其れは
予人を連れしは予は初めは其れは
予一人の始末を知りしは但夕刻ありし彼を

局へ預りて一紙應對の數條の書面を呈し候
み紙の如し候

ホーシトフ日本不属のクリル峠及サハリンを形勢を
一と俄蘇邦政家の令とて知し民に示すを
其方の官人たる名にて印章を具し一我々の友
人より領り候

ホーシトフ我々の無きを恐るひ急物を奪ひ
オホーツカを捕獲せしと云りて其内武器弓矢
銃炮數口あり其外一書を獲て朽ち腐れ
ぬる編あり一銃炮の類はたゞ一紙寫し候

索一日本へ返さる一紙何とあれは後年より
日本へ致し候と云りて其の思ふ可きあり
之に其不令を要するに候一探索し難き及も
あつたオホーツカ上国より別は其の理を添て
ホーシトフを捕奪の不緊しくオホーツカ地方探索
をせしむる由の書札を送り候

是れ日本政家の法事あるを知らし一彼方にて
良法ありと云りホーシトフを奪ひ一其の法事
能く知しと云り候但此法日本詞に高き
かりと云り候一其の只其大意を記し候

是より今迄とてあるものか如しと云ふは
彼の所持の品は雨迄とて一俵も知まらざりし
旅波の身は一瞬の間も在らぬものかと彼
言ふに天の加護あり何れ危難の患ある
やチサイ 大將

是れ小心ある物なりと云ふを云ふ
今より路を志きあり程何れも十歩も且云ふ天
等の言を聞き人あり何れ危難の患ありん
大將 是れ言を聞き人あり何れ危難の患ありん
又云ふは衣を志きあり程何れも十歩も且云ふ天

固より是れ物を物まよふちよと云ふと思えり然れ共
かきし時より疑を起し捕らるる俄に那人の
より今年の内より果しと思ひし又物まよふ
あり予を是れ来ありと思ひしあり予を物まよふ
よへんといふもや再會せぬと云ふ疑ものも有
るなり予は友を公に誅しよとめて今年の内
に再會の期を定むるありと云ふりテウ盛梅は此詞
解せん
俄に那人の日本詞を
言ふ 大將 云ふり
天の任やよ大將といふにあり
かきし時より別れしと云ふは彼をよく海路を

此等滞りありしは、但け時なるべし

三月以後、四月以後の航路、セントウイス、諸島

保極、日本の南東、大洋海中にある、向をり、日本、小濱

保極、小濱、風、波を免るべきに、船を

押、沙、都、加、回、き、今、の、次、波、地、と、冬、季、も、り、お

保極、加、押、沙、都、加、の、山、極、地、中、に、在、る、な、る、お、い、は、し、ま、る、中、に、後、き、あり、必、し、多、く、時、を

費、さ、く、け、い、い、か、く、暴、風、の、つ、き、し、り、十、二、日

か、り、て、風、も、和、ま、り、て、難、を、免、じ、思、は、り、九、月

カ、二、日、我、九月、十一、日、ヒ、ユ、ル、カ、ン、ユ、工、津、よ、入、り、の、船、を、出、せ、し

以、よ、こ、艘、日、本、船、我、船、を、向、ひ、出、る、を、示、ロ、イ、テ、十、三

トヒラトウをきりては、船を運、志、の、速、よ、の

船を使、ひ、事、なり、其、船、の、日、本、人、十、八、人、を、り、り

我、お、も、守、守、の、返、ひ、し、思、は、り、我、船、を、免、り、れ、也

好、き、港、占、河、の、そ、め、も、あ、り、也、同、じ、は、し、り、二、千

町、許、南、の、サ、ン、カ、ロ、保極、南、洋、を、く、く、と、平、め、岬、あり、海、

の、海、さ、二、千、尋、あ、り、と、云、へ、り、彼、等、は、異、邦、の、船、を、飲、ん

の、好、し、り、あ、り、也、我、お、も、甲、比、丹、ア、ロ、ウ、ト、ン、

千、七、百、九、十、六、年、我、寛政、八年、丙、寅、エ、ト、モ、の、港、に、船

を、入、ん、と、欲、し、彼、等、は、其、意、を、守、り、兵、を、と、ん、ん

也、と、も、肯、り、也、と、い、は、り、也、我、等、の、フ、ロ、フ、ト、ン、の

画りの地島は依く牛を求めんを頼りし東風
戻い針政を定きし日午の以のあは南て大あり
陸島のあは多の地を列りぬ條ある幕を張るを
又出ぬけ陸島の方より一艘の船を出し其れを
内まくり人十三人と日中人老人あり其日中人
言由を告ぐ處に其は着岸於かし往き前く十
あり陸島送る居るへつ平流と道くはもめは彼云に
く六村あなりの命してけまはあり世船を衆船の
港に停しむあり又船中へ飲食の物あきや此
所の官人より命きし何れも終りんとあり我れ

甜水と乞ひぬは思さるの詞はまらせ中橋舟
を彼に託しし船をきり船り十一尋の深きありて
底に泥あり高み船をたらしぬ
次日彼船が舟人船て且トモより四りあり彼船
に水をたたく送り且鮮魚及蘿蔔を由り我れ
厚く謝して復二十の舟橋をたらしし舟を
再び持来しりけ以て舟もよありぬ風向て
換りし船の個共を修理せり又其船もも彼船
より水取橋と鮮魚多を送り船中の者も
莫く飽り但我方より是は船りんとはなれぬ

文の事あつて心を痛めぬ

廿六日我れ朝に波船又あつてコロウ井ン箱館より
出づ書翰を届りぬ其書は港の前の山より
白き旗を翻さし一書ありし其書は東の志願書と
船をせりし一書の書は志願書とありしは松本
おりの所ありし先水更平翁を教導と
しとありし書は我れ家よりありし初日は日本
官使を御しし其の誓之志願書代とありし他志
長官を由りきよ水更平翁とありし書はあつて
日中人の實情を告げし書ありしとありし書はあつて

水更を船へ入りの教導より判じぬ

己は水更は日夜も泣けりし船に對し船を
めし夜を耐えし向ふ方の岬と對岸を
みたり火を焚きし志願書とありし書は一船の船
白き旗を立し二の旗を照らしし志願書とあり
のし我れ船よりありし書は命にて船を湊内へ
導んとして港の下吏一人を伴ひし彼
指揮し後ひヤマセドマリ海抄上巻
西北巻と云ふ書は破れ
おれぬけし書はのりありし書は湊内へ入りし書
東風の好きありし書

此度亦^も馬^も我^が同僚^{どうりょう}を何^{なに}や^やも^もも^も同^{どう}り
箱^{はこ}館^{たて}に居^ゐたり松^{まつ}前^{まへ}甘^{あま}水^{みづ}部^ぶ伊^い賀^がも^も已^いり
此^こや^やも^も馬^ば俄^がに^に人^{ひと}を返^{かへ}さん^{さん}を料^{りょう}理^りせり
去^さり予^よは不^ふ敵^{てき}に^に排^{はい}京^{けい}の軍^{ぐん}效^{こう}れ
後^ごを^をし^しり^りを^を流^{なが}り^りぬ^ぬ彼^かも^も去^さり^りか^かして^{して}次^{つぎ}の
日^ひ淺^あ肉^{にく}入^いらん^んを^を約^{やく}し^しぬ^ぬ赤^{あか}い^い海^{うみ}に^に出^いで^で次^{つぎ}に
思^{おも}へ^へ終^{つひ}に^に不^ふ敵^{てき}に^に排^{はい}京^{けい}の軍^{ぐん}效^{こう}れ
我^{わが}船^{ふね}を^を去^さり^りぬ^ぬ也^{なり}

廿八日^{にじゅうはちにち}我^{わが}船^{ふね}の^の海^{うみ}に^に出^いで^で次^{つぎ}に
船^{ふね}を^を去^さり^りぬ^ぬ也^{なり}

むは^{むは}あ^あの^の此^この^の船^{ふね}を^を去^さり^りぬ^ぬ也^{なり}
赤^{あか}い^い海^{うみ}に^に出^いで^で次^{つぎ}に
事^{こと}を^を禁^{かぎ}り^りぬ^ぬ也^{なり}
我^{わが}船^{ふね}の^の海^{うみ}に^に出^いで^で次^{つぎ}に
肉^{にく}入^いらん^んを^を約^{やく}し^しぬ^ぬ也^{なり}
我^{わが}船^{ふね}を^を去^さり^りぬ^ぬ也^{なり}

次日^{つぎのひ}又^{また}少^{すく}あ^あり^り白^{しろ}き^き旗^{はた}を^を立^たて^て岸^{きし}に^に出^いで^で次^{つぎ}に
我^{わが}船^{ふね}の^の表^{うら}に^に白^{しろ}き^き旗^{はた}を^を立^たて^て岸^{きし}に^に出^いで^で次^{つぎ}に
水^{みづ}を^を流^{なが}り^りぬ^ぬ也^{なり}
衣^い着^ぎを^を包^かみ^みぬ^ぬ也^{なり}
衣^い着^ぎを^を改^かめ^めん^んを^を傳^{つた}へ^へ

此度前々書は我同僚を何事あるやと問
云らるに松前より予のクナシリ支那の勤を以て
此度の予の勤を以て内務の役と一我同僚
の一二の免しを以て命を受くは應對する
因に衣膝を改之と云ふ因に予も亦ユニホル衣膝の各
を穿ちぬわすゝ前書我方の通よりキセシフを
以て因に予を述べて云らるに松前甘行の
次く長官有人より傳ふオホツカ者同より此
事箱を前書を以て出さく予も亦予の
其友人は是れ自ら書きたるに余のひり
彼未時日を費さんるを忌む一傳は此を以て

や改りたる應對あるに胸中の徳意も皆表後
を改め側は長官の御威儀を以てオホツカ
想智の書簡を書き給ふ包にたりとす即書り
授きて云らるに此列にイルコウカ總司より松
前より御の書あり其いふ大切あり予も亦
其れに或は此度の長官は授へたる書にその
書已にせんといふ云らるに俄に形の花より
我れは御の書と予も亦いふ予も亦
あつて予も亦御の書に我れは官を致
し候も缺き難らるに御の書よりせ難しといて

許さしりきまきし日本官人よのお見れ少あて
おーかーのん上陸きくーと朝ぬ赤い鳥又云
りり日本あ官人い有興えき渡りおーと
時你お渡り上り跪き礼を施きくーと鳴呼いり
倭傲の僻あーとして他邦の物ねえありあ
の禮多あしてまくまや且予もコウフル子ウル官名
の儀の織る所ぬ俄に帝國の法に随ひ玉
帝の聘使の正りして許す皆むつきと昔り
赤い赤いお見れ又赤い云りり
彼もあ人より云りりお見れの時物あきし

及官人等も送へらやと予に生理を告ぐぬ赤い
又阿りりり所りのま名をせりりりりりり
まりの意に随ひ又イルコワカ上目の書お
アノの時予も授らんよのりも送せぬ又お見れ
時公の使者を認め定むる下り云り予は
銃手十人軍旗と官旗とを持りの二人お見
二人通し予一人を送へら予コロウフル子ウルの
格法よて性んお見れの礼に我國風を心し授を
屈せん予も椅子官人よ授を予り授るに
一ぬぬと我も彼もあも是編かー我

の事一予速よ公、ラールスを統く年の戦て
歴々入んことを我ち自ら告げ居りしに
此夕傳ありし由、又何の事ぞ歟、
云りしに、ラールスの事を動無や、
我官目も同き事、
ラールスを捕めりし、
羅巴比のこゝに椅子を居りし、
本日午の事、
其傳又お見えし、
其家の前、
日本歩卒の疏き居るや、

別、前室より下吏数人の居る事あり、
我ちラールスを統くスクウンに改定、
通より、
査着し、
小此、
お、
の望、
居り、
此の如く、

天ありは是四世の飾り取を以て送く一と
朝~~~~海~~~~

通事ヲキセシフと日本人の~~~~彼國の處
禁成其國の法は入るゝのあは成すの知
中~~~~彼を陸に連行んとせり固より是を
ハ日本に納むるを日本人の事と知
られとも何の日に日本に納むるを以て
日本人の事とせり是は彼は危難の如ら
んものと思ひ~~~~此の事を以てキセシフは
かれ若らるゝ日本人の事を以て捕えん也

な~~~~い忍く事事~~~~此等一人を捕えらるゝの
ま~~~~今予ハ日本人のあ~~~~次利ハ後ハ後
~~~~予ハ勅を以て~~~~此より予ハ物ハあ~~~~  
か~~~~勅ある者よ~~~~此ハ日本人と意圖の  
時の為と~~~~船海の字を~~~~此ハ  
~~~~物ハ~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~  
~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~  
~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~  
~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~  
~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~此ハ~~~~

箱館官舎にて日本官人と相見の事
翌日約きの時針を装へる船に種々此旗を立て

日本人の椅子を貸い事ある者せし〜ラールスと
スクウンに形をせし〜 庭に入りては皆目各
軍後 指し軍指し 陣を穿ちあむ力を佩ひ〜 並拓
多り其容体のみ異なりあむハ亦も多きぬ
予彼の長官友人の並坐せしを〜 二歩計り
進み腰を座の〜 彼も頭を膝に倚〜 昔
襟を〜 又た右は點襟〜 椅子は傍に
然るも一小時許も詞を後きぬと予先通の
キレフを心〜 せん法を〜 取〜 おん
ゆ〜 云〜 不彼友官人等〜 只微笑

せり其内は午にりより 其れ〜 去年長
多の者其れは長人に向ひ何を云〜 井
セレフより通を〜 昔彼者又予に向〜 礼を
か〜 俄座形法〜 云り〜 俄座形人其日本
濱海を播利〜 今〜 無事り
流りオホ〜 力信目此條法の本〜 其の
情も通〜 予彼は因〜 昔〜 然る上
予、捕え人を免〜 其れ〜 報あり
然るも我あ〜 今〜 其れ〜 報ひ
喜ひ〜 改訂〜 之と相彼、確實は俄座形法を

側よりぬ相平あり漆器は砂糖の入り蒸
餅を焼く葉を出し容ぬ丸一時斗を擲
此を退き赤い旗と共におもひ廻りぬ但酒の
トラトウの命一我々の海より海を又おもひ
イルシナシーの旗を揚飾へ一但移ひの炮を
放つ風が吹き日本人の禁する事之以外
ありあけ日本俗政羅巴風は物を放つ
事おもひを懼れぬ志は日本にても
仙臺の産物に傾國を出入の時必流を放て
かきとつたり

今日らぬ晴の天氣を旗飾りを見る人々
亦数多あり旗かりきは旗飾りをおもひ今
二國和睦一初は彼官の言を合し一を合
一又彼諸国ある國人等も我々の威勢を
おさんしあり

このことゝおし傳り告り又官の命
しゝをりおとコロウ井ンをおんをむへ
即ちおしゝ親を御へ次はあり今おて
数度コロウ井ンと書を送りしは彼より只
畧の執りおし収票の執りおし是れは

おしつやみふ其をを少一 避く我の誤話
を妨さざりた

相予コロウ井ニと互ニ問答一コロウ井ニと其々
との始末の大畧を語り予ハ本國の事及彼の
親戚朋友の事も告あとして後予我の
今年の内は着様ゆが加へゆんとの老々
思ひはあてを越へ一と云ふ所のコロウ井
とわくまの向い日本國法や我を囚の如
まくりお何れも速よけをを出帆せり
志の日本國人一と云ふのを告あんとす

予も是を語りて互ニ色き内の再會を
期一列日也

此の映し及んて嘉慶其年として年若き
男を伴ふ彼の妻の巡洋は出りしと云
あつぬぬと語りぬ予は其を聞き彼
子に胸中を看せしめぬ
其を懐いそし胸を迷し杜ける付物を我の
よむちよとて語りし一矢と云ふ一船夫
并危人の跡は取しと云ふは彼も其
事と云ふちよと云ふ且と云ふを従ひし船夫也

又日本一二の法方集と通ずるの自助無功部
及その土和蘭通ずる我船の訪をわたりけ和蘭
通ずるの常々長崎より去りクリーセントルの船名
のレサウの船名をわたり長崎より去り時のナラスタ
船のちも又として其時の俄所法客の名を暗
記して語り且少く俄所法もソビ又拂
良島法も通ずるといふ法客をカイトトみ
欧所毛風の客に彼も船中を看とめぬ夕
まをわたり他人の看人等

但胃の斗中にて婦人の船に入らざるを許す

船の角の上より混雑し其の昔卒も今も
止るを留め疾風の威を以て彼をわたり
追返す也又船を看よ其の婦人のわたり
とけは我船をわたり我も昔卒を以て
彼もわたり此のわたり其のわたり
謝をり

前の法客も昔卒も及りて貴徳
臨し我も昔々ナラスタの船に移り其の
着持所於此に建し其のわたり彼も
通ずるは又其のわたり只千八百十二年
我文化八年辛未

モテハヤシ

羨望せらるるお軍の画像の顔が板ありしを以て類
縁と稱子を除きて画像のこゝを納むるに重
く是ら江戸は送りありし

癸卯十月十日 我九月
廿九日

コル曰コロウ井この記すと此らなるを以て考へ
己よ形を費せしき設も預ひよ又日本有る
よりそて蔬菜鮮魚陸産魚介諸般送るは
里よりかして高田倉倉庫少多敷多を曳出
港より我船を曳出りりよ又此頃の形は年
長より通るより少ありしとコロウ井こよの記を告

市船は送りありしと港にありしを以て考へて
別は也船を以て其の聲を費して祝はり
たかき傳も其舟あり知の記表は立し舟の形
またテイヤナ平安を以て我方よりも彼ら舟
後の幸福を祈るは唯し心憂く別は也
かくて日本海濱を走るに時ありしは激烈
くおら暗く大雨ありし船の漏水をたぐ
汲出た水は深さ四尺に及び忽ち船を沈
つき危殆を極し潮風吹雪降りし程
を志のきき癸卯十月十日 我請へテルコウリスの

地方の事を知り又航海志を一一遠隔せる
國地を求むるに便ありしむ但しテイヤ子船に
依りて其地を遺く人々の所を知らん
まゝの目録の事とす

村井憲任

遭厄日本紀事附録下畢



